

# 地 理 B

**基礎知識を習得し、それを図表問題でも活用できるようにしよう！**

## I. 全体講評

受験学年の平均点は56.9点であり、今年のセンター試験本試験の平均点62.3点に5.4点及ばなかった。センター本番まで約2か月半、さらなる努力が必要である。正答率の低かった問題を分析すると、高校地理の基礎知識が身につけていないことに起因するもの（解答番号4, 19, 24など）、基礎知識を活用して図表を読み解く力が不足していたと考えられるもの（解答番号26, 29など）が目立つ。地理は暗記科目ではないが、最低限の知識は身につけておかないと歯が立たない。まずは、教科書・図説資料集レベルの基礎知識を身につけよう。その上で、過去問やセンター型問題集で、基礎知識を利用して図表問題を解くコツを身につけたい。Ⅲ. 学習アドバイスを参考になるだろう。

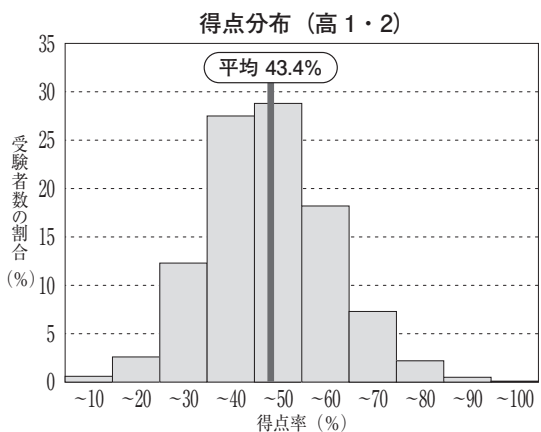
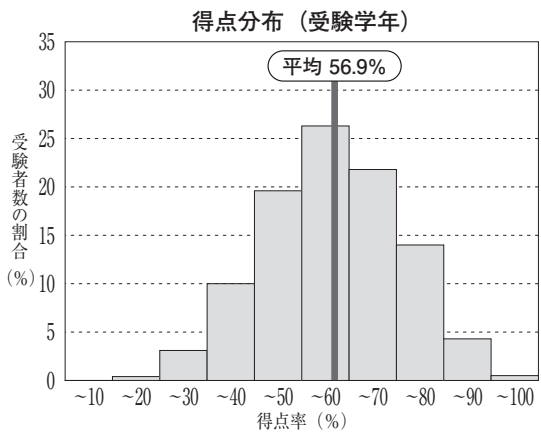
高1の平均点は43.3点、高2の平均点は43.4点であり、まだまだセンター試験レベルの問題に対応するだけの実力が備わっていないことが明白になった。顕著な例を挙げると、解答番号10は、工業立地の基礎が理解されていれば難なく解ける基礎問題であり、受験学年の正答率は79.6%と高かったが、高1の正答率は37.5%、高2の正答率は36.5%と低かった。まずは教科書・図説資料集で扱われる基礎的な内容を理解することから始めよう。Ⅲ. 学習アドバイスを参考にし、そろそろ本格的な地理の学習に着手したい。

## II. 大問別分析

### ■各学年の平均点、大問ごとの得点率

学年	平均点	第1問	第2問	第3問	第4問	第5問	第6問
高1	43.3点	37.9%	55.7%	43.9%	42.0%	34.2%	44.4%
高2	43.4点	40.7%	55.4%	41.2%	39.8%	35.4%	45.7%
受験学年	56.9点	51.4%	75.4%	53.9%	58.7%	46.3%	54.0%
全員	53.0点	48.2%	69.6%	50.3%	53.2%	43.1%	51.5%

※得点率、正答率、選択率は受験学年のものとする。



### 第1問 世界の自然環境と自然災害

日本の地体構造は重要。列島周辺のプレート、海溝、構造線等の位置を確認しよう。

大問全体の平均得点率は51.4%と6つの大問中

で2番目に低く、振るわなかった。問4の正答率が21.2%と低かったためだ。日本列島を囲む4つのプレートの位置関係と、西南日本弧を内帯と外帯に分ける中央構造線の範囲を正しく理解していない受験者が多く、①と②の選択率が正答率を上回ってしまった(①の選択率は39.9%、②は30.8%)。日本の地体構造、すなわち、日本周辺の4つのプレートとその境界に発達した海溝・トラフ、日本列島を東北日本弧と西南日本弧に分けるフォッサマグナ(西縁は糸魚川・静岡構造線)、中央構造線の位置関係は完璧に頭に入れておかなければならない。教科書や図説資料集に載っている地図をしっかりと見直しておくこと。

### 第2問 エネルギーと鉱工業

**大変良い結果が得られた。このまま得意分野に育て、得点源にしよう!**

大問全体の平均得点率は75.4%であり、6つの大問中で最も高かった。正答率が60%を下回った小問は一つも無く、とても良い結果が出たと言える。エネルギー・鉱工業の分野はセンター試験頻出の分野であるから、このような好結果が出たことは大変喜ばしい。このまま得意分野に育て、得点源としたい。発電、資源、工業のいずれに関する問題もよく出来ていた。

### 第3問 貿易

**セーフガード、フェアトレードといった貿易関連の用語について学び直しておこう。**

大問全体の平均得点率は53.9%であった。最も正答率が低かったのは問4であるが(18.1%)、日本のような国内総生産の大きい国は、輸出依存度や輸入依存度が小さめになるということを押さえて図を読むことができなかったであろう。やや難しい問題ではあったが、このレベルの問題を解けるようになると、差をつけることができる。近年の貿易の動向や用語の意味を理解しているかを試した問3の正答率もやや低めであった(51.7%)。間違えた受験者は、セーフガード、フェアトレード、サービス貿易などの貿易関連の語句について学び直しておきたい。

### 第4問 南アジア地誌

**地誌の得点力をアップするために、世界の国々のあゆみと現状を正しく認識しよう!**

大問全体の平均得点率は58.7%であり、6つの大問中で2番目に高かった。多くの高校が系統地理のあとに地誌を扱うため、例年、地誌の学習は遅れがちになるが、そろそろ本格的に地誌学習に取り組む受験者が増えてきたようだ。極端に出来の悪い問題は無かったが、問2の正答率が40.6%とやや低かった。Bのジャムシェドプル周辺について述べたカを、Cのダッカ周辺について述べた文と判断した受験者(⑤または⑥を選択した者)が全体の37.0%に達してしまった。高校地理をある程度丁寧に学んだ者ならば、ダッカのあるバングラデシュを、古くから重工業の発達した地域などと考えたりはしない。長年貧困に苦しんだが、ようやく繊維工業が発達し始めた国と考える。おそらく、カの文中にある「河川開発」という言葉を、バングラデシュのガンジス・ブラマプトラ川デルタと結びつけてしまったのだろう。まずは、教科書や図説資料集を中心とする基礎学習で、世界の国々のあゆみと現状を正しく認識しよう。

### 第5問 インドネシア・メキシコ地誌

**津波地震の震源となる海溝の分布を、地図帳などでしっかり復習しておくこと。**

大問全体の平均得点率は46.3%と、6つの大問中で最も低かった。2国の比較を行う地誌問題は、2016年のセンター本誌から出題されはじめた新しいタイプの問題であるため、不慣れなのであろうが、模試の復習などで力をつけ、対応できるようにしておくこと。問1の正答率が19.4%と特に低かったが、多くの受験者がスマトラ沖地震の震源域となったスンダ海溝の位置を、正確に把握していなかった。巨大な津波地震を引き起こす海溝は、太平洋の外縁とインドネシアの南側の、海洋プレートが別のプレート(おもに大陸プレート)に沈み込む場所に分布する。海溝の分布は基礎中の基礎である。地図帳でしっかりと確認しておくこと。問3は正答率が43.5%と低めで、誤答④の選択率が31.0%と高めになったが、1980年のインドネシアのグラフだけを探そうとし、2014年のインドネシアなど、他の選択肢の特定を怠ったために、「パーム油⇒インドネシア」という単純な思考で④を選んでしまっ

た受験者が多かった。図表問題には、全ての選択肢を特定するつもりで臨むこと。

### 第6問 地域調査 (新潟県)

知識を活かして図表問題を読み解く力を、センター型問題集等で身につけよう。

大問全体の平均得点率は54.0%と標準的な出来であった。問1の正答率が24.1%と低かったが、大多数の受験者が、新潟県の8月の日最高気温をエではなくウと判断してしまった。多くの受験者が、夏の日本海側はフェーン現象で高温になりやすいこと、夏の太平洋側はオホーツク海気団から吹くやませの影響で低温になりやすいことを知っていたはずだが、その知識を活用して図表を読み解く力が不足していた。センター型問題集と過去問の図表問題を一間でも多く解き、解説を熟読して、知識をフル活用して図表を解くコツのようなものを習得してもらいたい。

## Ⅲ. 学習アドバイス

### ◆受験者及び既に受験勉強に励んでいる人へ

センター試験まで約2か月半となった。教科書で扱われている内容や、図説資料集で大きく取り上げられている内容が頭に入っていない場合は、熟読して、まずはそれらを理解すること。その上で出来るだけ早くセンター試験本番形式の問題集に取り組み始めたい。しばらくは60分の試験時間にこだわらず、教科書、図説資料集、用語集、地図帳を再確認しながら、時間をかけ、100点をとるつもりでじっくり問題に向き合うとよい。文の正誤判定の問題なら、正解以外の選択肢についても、理由をはっきりさせた上で正文か誤文かを判定する。統計問題・図表問題なら、正解以外の選択肢についても、該当する国、都市、産品などを、根拠を明確にした上で特定する。このような演習を繰り返せば、高校地理全体を復習しながら、基礎知識や、図表問題を解く思考力が身についてくるはずだ。

### ◆これから本格的に受験勉強に取り組む人へ

まずは、基礎知識を習得ことに専念するとよい。ただし、地理は暗記科目ではないから、用語集に載っている語句や、難しい参考書の文章を丸暗記する必要はない。教科書を丁寧に読み、図説資料集に

載っている地図、グラフ、写真を、興味を持って眺め、それらの解説に書かれた内容を理解すればよい。地理はたくさん暗記することよりも、重要事項を正確に理解することの方が重要な科目である。例えば、世界の山脈の名前を全て覚えようとするよりも、新期造山帯の山脈はプレートの境界付近に発達していて地震などが多いこと、古期造山帯の山脈はプレートの境界から離れていて、石炭が豊富に産出することなどを、理解しておくことの方が重要である。